

---

# **涙の秘宝・クロウの正義**

高坂桐乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

涙の秘宝・クロウの正義

### 【Zコード】

Z3255C

### 【作者名】

高坂桐乃

### 【あらすじ】

第一部赤毛狩り。マゼンダと言う少女の赤毛を取る任務を遂行する第2部涙の秘宝を求める旅。涙の秘宝を手に入れる話。物語の真のキヨン（きよへん）編も明らかにWWAでも涙の秘宝・クロウの正義を製作中。

## プロローグ（前書き）

無限のファンタジー　涙の秘宝・クロウの正義によつて  
主人公クロウが涙の秘宝を求める理由、そしてその涙の秘宝の力  
それを知る為の物語、この物語は3つの小説の1つ目の物語  
それの続きの世界での冒険する物語も出てきますがこれをまずは読  
んで下さい。

## プロローグ

「このはのどかな精霊の町。

この町は豊かではなかった。

この町に居るクロウはお金が無い孤児の少年。

親に捨てられて孤児になつた。

そして……この依頼所を見つけたのだ。

大金をもらえるという依頼、魔法の赤髪を手に入れると云ひ任務をする事になつた。

遠くへの道のり、テリオンシティーと言ひ場所に行けばその髪を持つ者がいるらしい。

クロウはまだ、この依頼をした者の本当の目的を知らなかつた……

「行つてきまーす」

僕の名はクロウ。13歳になる少年

5歳の頃、父と母に捨てられて自力で育つたんだ。

僕の住んでいるのは精霊の町、地底世界だ。

外の世界にあるテリオンシティーに行き、赤髪を手に入れなきゃ行けないんだ。

僕は地上世界で洞窟を見つけたのだ。

「ここが洞窟だな」

洞窟に入つていつた。暗さはギリギリで見える程度。そこにモンスターが襲つてきた、ベチョベチョのスライムだった

۱۰۷

スライムの粘々粘液でクロウが動けなくなつた。

僕は左手が溶けてしまつた。

その後スライムが噛み付いた

「ああああああああああああ」

スライムの所為で血だらけになつたクロウだったが……その後、誰かが助けてくれたようだ。

گزارشات

クロウは今夢の中へいた。

そして自分が誰かはわからないしどうしてここにいるか忘れていた。

・・・・・ わからぬ ・・・・・

「どうしてお出でになるか。

何しに行つたか。

思い出した。

赤髪の少女を・・・

何するんだっけ。

「わからないか。 そろそろ田を覚ます頃だ、お前の名前はクロウだ。  
わかったか。」

そうしてクロウは田を覚ました。

## 第1章 旅立ち、藍染の謎（前書き）

第1部の初期の話

## 第1章 旅立ち、藍染の謎

「リリル」

「」は教会だつた。

シスターさんが一人やつてきた。

そしてシスターは喋つた。

「さつきやられていたらしく私が助けてあげたのよ」  
シスターは優しくうなづいた。

そしてクロウは周りを見た。

そして・・・

「せ、狭いな。」

クロウは狭く感じた。

そしてシスターは

「この教会は小さな教会、左手を直してあげただけでも感謝しなさい！」

シスターは怒つて言った。

クロウは左手を見た。

そして驚いた。

「ひ、左手が治つてゐる……」

「お助けしてよかつたわ。もう大丈夫、冒険に行つてらっしゃい  
優しいシスターだつた。

クロウは武器が零で借錢するしか武器防具を買う方法がなかつた。  
でも借錢する事にした。

「アルバイトをして來い。涙の秘宝 クロウの正義（省略）ですね。  
題名は」

題名は涙の秘宝 クロウの正義 赤毛狩り だつた。

題名が小説の話に出てくるとま。

「傭兵が良い仕事のよつだ」

そこに神様が来た

「ハイソード+2と銅の盾+5を貸してあげる。結構上の仕事をし  
ても大丈夫だらう。そうすれば冒険を始める頃ぐらいの資金になる  
と思つ」

神様は優しくハイソード+2と銅の盾+5をクロウに差し出した。

クロウは装備して一言言つた

「ありがとう」

その後クロウは傭兵任務レベルAクラスを挑戦した。

クロウは超初心者であった。

他の傭兵達は上級者だった。

「俺はククール、お前は新米か」

この人は銀髪のショートヘア。盗賊風

「俺はクロウです。宜しく」

クロウは言った。その後ククールは

「すごい、ハイソード+2つて超強力の剣。俺のライトシャムシールよりレベルは下だが。冒険者レベルはいくつだ」

そしてクロウはうなずいた。

「レ、レベル1です。」

ククールはうなずいた。

「はっ」

クロウはまた言った。

「レベル1だ」

ククールはそう語った。

「レベル1でAクラス&ハイソード装備か。す、すきって何故だ。  
お前の盾ってどんな盾かなあ」

そこに神様が乱入

「このクロウさんの盾は雑魚盾ですよ。剣だけの人間です。」

そして神様は超小声でクロウにこの盾は最強なことを教えたのであった。

それはクロウ以外には雑魚盾に見せる為。

「（盾を持っている事でも知れたら取られるとかすこすぎとかで大  
変な事になっちゃうもん。僕つてすごいでしょ）  
神は心の中でそう言つていた。

ククール、神、クロウが話している時にキットン族が現れた。

そしてそう話した。

「オイラはガンドムと申します。よろしく

このキットン族はガンドムと言ひ名前だった。

そして任務をする時が来た。

神はクロウに行つて「うっしゃい」と言った。

そしてクロウはAランク任務を挑戦する事になった。

任務は10組に分かれていた。

AからJまでだった。

ガンドムはCに入った。

ククールはAだった。

クロウはFに入った。

クロウはペアの人は女戦士の霊と少年の水面と槍使いの花梨とリーダーの神風特攻だった。

任務をがんばる事にしたクロウだった。

「僕は水面みなも、君は誰だ」

この人は水面、青い短い髪の少年だった。

「俺はクロウだ、ヨロシクな

クロウは張り切っていた。

「私は霊。宜しくお願ひします。」

その後花梨も自己紹介した。

「あたいは花梨かりん、よろしくね」

花梨は金髪の髪をポニー・テールにしている。

そして大きい槍を持っていた。

「私は神風特攻だ。ここはリーダーなのだ。クロウ君、命令は絶対です。」

コイツは神風特攻、実は男だったりするキャラクターだ。

そして花梨は長いポニー・テールを首に包んで話した。

「クロウの特技はなあーに

そしてクロウは答えた。

「俺の特技は瞬歩と言う技だ。力を消費して足にためて瞬間に歩いて長距離＆早い移動をする」

クロウはすごい力を教えた。

それに水面は答えた。

「親の名前は」

クロウは答えた。

「す、じへせに愛染蘇右介と申しつす、じへせ爺さんちが居た。でもす、じへせの子孫を残して家出をした。」

「す、じへせじゃん」

霊は言った。

「他にもまだうを沢山身につこうるんだよ」

クロウは苦笑して言った。

其処にゴブリンが現れた。

長い耳をたらして棍棒を持っていた。

「ククク、お前らを殺す。」

雲が水竜を召喚した。

「水竜、君のゴブリンを倒して」

水竜は小さかつた。

「ゴブリンには大きいダメージを与えられなかつた。

「くつ、雲は弱いな。俺のハイソードの威力を思い知れ」

クロウはゴブリンを切りかかつた。

しかしゴブリンはこんどクロウの攻撃を弾いた。

「殺してやる」

ゴブリンはぶん殴った。

クロウは大怪我をした。

「はあ。傷を癒して欲しい」

クロウはそう言った。

そして花梨は

「無理、薬草は高いお金を使つ。自然に治るのを待つしかない」

クロウは盾で祈つた。

「うああ―――。でも傷がいえる」

クロウの傷は見る見る回復した。

「Uの盾は回復できるようになつてているんだ。すごいよ。」

クロウは実は愛染蘇右介の子孫だった。

傷はいえたのではなく広がったのだ。

聖なる力はクロウを苦しめた。

そして悪靈となつた。

「ククク、殺してやる、殺してやる……。」

クロウは性格が変わつて花梨を襲つた。

「仕方ないです。『雷光一閃突き』」

電撃の一撃がクロウを襲つた。

しかしクロウは瞬間に避けて花梨へ攻撃。

そこで水面は守つた。

「技で守つてダメージをなくす『精霊氷壁』」

氷が集まりクロウの攻撃を守つた。

だが銅の盾は粉々。

神「最強の盾だから今は早い。入試の為に装備させたのですよ」

クロウはつづいた。

「ありがとう

## 第1章 旅立ち、藍染の謎（後書き）

話の内容がわからず、うらこでしょいね。

## 第2章 シャーサク襲来（前書き）

シャーサクと言つ男が襲来していく。

僕のこの話は他の方のシャーサクとは違い、テンツココ（僕）モ  
デルキャラ

前回のあらすじは無し

## 第2章 シャーサク襲来

「……に誰かがやつてくれるんですね。」

シーフ姫は大臣と神と一緒に話していた。

神は答えた。

「多分クロウと神風特攻団だろ、うなあ」

神は教えた。

「トラップ城のトラップで襲つてあげるわ。」

シーフ姫は大臣にお願いしてトラップを沢山仕掛けでもらった。

その頃クロウ達は

「腹減つた」

クロウは2日間なんにも食べていなかった。

「ククク、ゴブーダさまがこの冒険者を殺す」

ゴブリンのゴブータが現れた。

「豚だ」

クロウは喜んだ。

そして水面は

「凍らせて倒そう『アイス』」

氷の魔法はゴブータに当たった。

しかし威力が低くて一撃では倒せなかつた。

「私、花梨がこの豚を倒します。『エアロスピア』」

風の力が槍に宿り、ゴブーツを切り裂いた。

しかしゴブーツは耐えた。

ゴブーツが反撃をする。

「やああ———」

クロウは瞬歩でよけた。

「ゴブーツ様の手下を使つてやる

上からウイスプが2匹出でてきた。

「殺すか『ファイアー』」

ウイスプはファイアーを出した。

雪はアクアを使った。

ファイアーは消え去った。

「魔道も使えるぜ』『サンダーボール』」

クロウのサンダー・ボールはウイスプを殺した。

「しかたない。石を使おう。最終軍団・石隊、旅人へ石を投げまく  
れ」

クロウ達の所に石が飛んできた。

クロウ達は石をよけた。

しかし石はホーリングしてクロウ達に当たった。

クロウは打撲をしてしまった。

「ぐつ。」

「！」の花梨は雷を操れます。『サンダーランス』

花梨の持っていた槍に電気の力が蘇り希望を与えた。

そしてこの電気がゴブータを襲う。

「ああああああああああああああ」

ゴブータは焼け死んで豚肉となつた。

「私、花梨がこの豚を倒します。『エアロスピア』」

風の力が槍に宿りゴブータを切り裂いた。

しかしゴブータは耐えた。

ゴブータが反撃をする。

「やああ———」

クロウは瞬歩でよけた。

「ゴブー タ様の手下を使つてやる

上からウイスプが2匹出てきた。

「殺すか』ファイアーハー』

ウイスプはファイアーハーを出した。

雲はアクアを使った。

ファイアーハーは消え去った。

「魔道も使えるぜ』サンダーボール』

クロウのサンダーボールはウイスプを殺した。

「しかたない。石を使おう。最終軍団・石隊、旅人へ石を投げまく  
れ」

クロウ達の所に石が飛んできた。

クロウ達は石をよけた。

しかし石はホーリングしてクロウ達に当たった。

「ぐつ。」

クロウは打撲をしてしまった。

「！」の花梨は雷を操れます。『サンダーランス』

花梨の持っていた槍に電気の力が蘇り希望を与えた。

そしてこの電気がゴブータを襲つ。

「ぎゃあああああああああああああ」

ゴブーラは焼け死んで豚肉となつた。

「これ美味しいな」

クロウは美味そうに豚を食べていた。

「ハハリンは豚だもんね」

雪は優しげに言った。

其処にトラップ城からワープしてきたシャーサク（作者の文字を逆さにした）が現れた。

実は今までの神もシャーサクの事である。

「フフフ、貴方達。僕を倒せるかな。」

シャーサクは勝負を挑んだ。

そして花梨の攻撃

「これでどうよ『ニアロスピア』」

そしてシャーサクの反撃

「そんな雑魚技はこの技で反撃『風雷乱れ突き』」

シャーサクは世界で花梨以外では一つしかない風雷の槍を隠し持つていた。

シャーサクのすごい攻撃は花梨の急所を突こうとした。

「花梨さんを守つてやる『精霊氷壁』」

水面は精霊の力を呼び覚まし氷の壁を出させた。

シャーサクの攻撃はシャーサクが手を抜いていたので壁が壊れてそれで攻撃の威力が終了する。

「まだ私の攻撃が残っている『水竜大乱舞』」

湖のたくさんの水から水竜が沢山出現した!!

そしてシャーサクを襲つた。

しかしシャーサクはよけた。

「まだまだー」

水竜はすぐには消えずシャーサクを襲い続ける。

「仕方が無い。『オーシャンウーブ』」

シャーサクは海の波を起した。

「ひとな攻撃ではこの攻撃は防げないわ、シャーサク

雪は言つた。

「それはどうかな。貴方の技の威力と同じ量の魔力に留めきつたか

ら相打ちだ。バイバイ

攻撃は相打ちになりシャーサクはトラップ城にワープした。

そしてクロウ達はトラップ城へ向かつた。

その後神風特攻は語つた。

「わ、私の出番が有りません。」

「クロウさん。出番が少なくて悲しいです。」

神風特攻はクロウに語つた。

「作者じゃないから仕方ないないよう

クロウが語つた。

「死んじゅうよー」

冷たく言われた神風特攻は魂が抜けた。

嘘だった。

アニマル横丁のパクリだった。

「そうか。このページは私が沢山登場して嬉しい

其処に馬が襲つてきた。

「殺す

馬は殺すと言つた。

「ならば死ね

クロウは馬を殺した。

「馬を倒した。」

クロウは言った。

そして信太と書いていた。

「これは多分しんたと読むと思つ」

クロウは言った。

そして雲と水面は

「これはのぶたと読むと思つ。」

花梨は信がのぶと読むと思ったのでのぶたと読んだ。

そしてクロウは多数決で負けた。

その後クロウ達は豚汁が食べたかった。

そしてゴブリンのジルバンが居た。

### 第3章 謎の軍団との闘い【前編】

「ククク、僕人様。この人を雇わせてください。」

そういうつてダークライズは僕人参からフィーネ・ディアン（ディア  
ン）を雇つた。

「ダークライズさん。私は必ずやクロウを倒します。」

そしてダークライズは

「高い雇用資金を払つているんだ。せいぜいがんばりな

そして・・・

クロウ達の場所へディアンは向かつた。

その時クロウ達は豚汁を食べたところだつた。

「ねえ。クロウ。豚汁はよいねえ。」

雲はそう言った。

その時クロウ達の所にティアンが現れた。

「俺は殺戮の王と呼ばれているフィーネ・ティアンだ。ダークライズの野郎に命令でクロウ達を殺戮しに来た。」

ここには金髪の髪にウエーブしていて金色の瞳の少女だった。

二重人格の酷い性格のほうになっていた。

「久々の敵だよ。トラップ城はどうなったんだ。」

花梨はそう語った。

そして・・・・・・

「フフフ、俺の弔いの剣の初めの犠牲者はだれだあ。」

そして水面が前に出た。

「花梨さん。クロウさん。僕ががんばります。」

「花梨は戦わなくとも大丈夫です。多分」

花梨は水面にそう言った。

そして・・・

「神様にがんばって貢うしかない『神の教え』」

そして殺すなと言ひ答へが出た。

その時。ダークライズは僕人参と話した。

「僕人参さん、コレナ・クリスティも雇えます。」

そう言って雇つた。

そして、コレナ・クリスティ（コレナ）がクロウ達の場所に来た。

「ディアン。なにをやつていたんですか。」

コレナは言った。

そしてディアンは

「私は神様が倒すなと言いました。どうでしょうか。」

そしてコレナは言い返した。

「2人で戦おう。そして倒す。そうしないとダークライズさんがかわいそうです。」

そしてバトルの展開が大変になつた。

「雲、水面、そしてクロウ。みんなで力をあわせるんだ。」

「わかりまし———た。」

そしてその時敵の攻撃

「どうせ……『オーシャンエーブ』

海水が波となってクロウ達を襲つ

「苦労しているんだ

「私は本当はシアンさんの手下だったの。最終技で一気に倒します。『皆殺し』」

ディアンは大きい邪氣に包まれて一瞬にして周りの草木を枯れさせてクロウを襲つた。

「俺はわざがなかつた。しかし……『ホロウファイナル』

クロウは邪悪な意志が舞い怒りディアンに突撃した。

そしてディアンに負けた。

「技初心者は死ぬべきだ『ディンの指輪』開放・テラ『ディン』」

「そんな弱つた人を殺す事は悪い事。花梨様が消します。『氷闇の大盾』」

闇の氷が纏つた盾が表れた・・・

テラディンは消滅しディンの指輪は碎けた。

「全ての力を捧げます。『神の兆候』」

ディアンは生命を生贊にしてオシリスの翼神龍を召喚した。

シユーネール

オシリスの翼神龍は死んだ。

しかし稻妻軍は襲つてきた。

そして零と水面は打たれて3日間寝たきりレベルを負つた。

「私だけで倒すのですか・・・。むりだろ?」

そしてアズレ・フルター（アズレ）もダークライズが雇つて襲つてきた。

ダークライズは雇用資金38500エルドもあつたようだ。

「この人たちは強そうだな」

そうアズレは言つた。

しかしコレナは

「敵はアイツらだけ、楽勝よ」

そしてアズレは

「僕の計算が間違っているとでも？」

### 第3章 謎の画図との闘い【後編】（前書き）

第3章の後半

### 第3章 謎の軍団との闘い【後編】

「僕はあの人と戦う。あなたは槍少女と戦え」

アズレはそう言った。

そして「コレナはきたいに答へようとした。

「海龍よ。あの少女を襲え『オーシャンデラゴントルネード』」

海から龍の竜巻が襲つてきた。

そして・・・・・

「もうあんな思いはしたくありませんから・・・『疾風乱れ突き』」

連續して風で竜巻を弱めようとした。

しかし強くなつた。

「仕方ないです。『雷光一閃突き』」

そして弾かれた。

そしてこの技でボロボロになった。

「最終技を使います。『エンドレス・オブ・ザ・ファイア・ミス』」

コレナの持っていた杖から火炎が出て花梨を襲つた。

そして服を燃やした。

「フッ。アズレぐらいの相手は雑魚ですね。『ストームファインド』」

「

花梨は竜巻を起こし、周りにあるものをアズレに向かって飛ばす

そしてアズレは啞然とした。

「ぼ、僕の必殺技を使うなんて。大ダメージだよ『ファインドトルネード』」

ただの竜巻で花梨を攻撃した。

「あまいわ！！」

花梨は槍でアズレを襲う。

「ならば基礎魔法だ『バリア』」

バリアで守った。

そして花梨は

「剣の力を」

花梨の手に大量の魔力が舞い起こり強力な白い手刀を出した。

そして攻撃した。

アズレは大怪我をした。

「コレを使って一気に最高の技とは『ヒールブレス』『ダウンブー  
ア』」

契約の槍を分身させ、空から降らせた。

そして傷が回復。

「ジル・パリスが使う技を使ってやるー『戦鬼大槍突改』」

アズレ退却

そして3日後皆元気になった。

クロウは技が無かつた。

そして逃げた。

「技を使つしかないだろ。クロウ。かわりに僕が技を使う『精靈氷壁』」

氷の壁でウエーブをバリアした。

それは隙だった。

「一気に殺してあげるわよ『無音殺戮』」

花梨は音なしでも動いているのを見た。

「そこだあ――。『風雷乱れ突き』」

そして相打ちして花梨の技が強かつた。

「ああああああああああああ」

ディアンは大きい傷を負つた。

「た、退却だ、お前達は強い。眞の目的地はもうすぐだ。」

「ティアン、とじぬだよ」

クロウはティアンに言った。

そして

「逃げマース。」

ティアンが逃げようとしたが花梨は怒った。

「ティアンさん、ティアンさん。死んでもらいますわ『風雷乱れ突  
撃』」

ティアンは風雷乱れ突きをまた受けてしまった。

そして力尽きた。

「もひ敵は居ないだろ?」

クロウが呟いた。

そしてこの先にあるテリオントライへ旅立つのであった。

## 第4章 マゼンダ……

「近くで買つ事が出来た。」

俺は店ですかバサミを買つた……

これはマゼンダのアレを手に入れるためには必要。それが任務だからだ……

「何をしにいくのかな」

仲間の水面は唱えた・・・

そして俺は

「マゼンダと言つむなじの髪を頂戴する為だ。」

そして俺はある街に着いた。

ここはテリオンシティー。伝説の魔法の町。  
過去にテリオン村と呼ばれていた場所・・・

ここでは魔法石・テリオンで勇者が救つたと言つわざがある。

新たな大魔王・ヒカルの出現でも同じ勇者が救つたと言つ・・・  
この世界はパラレルワールド。

テリオンシティーがあつても不思議じゃない・・・

「霊、水面、花梨、このテリオンシティーは謎が多そつ」

その頃・テリオンシティーの姫君・マゼンダは

「何か悪い予感がする……」

あたしは赤く長いダブルポニー・テールをしている。

ダブルポニー・テールとは2箇所のポニー・テール。別名ツーテール。作者が考えた名前。

テリオンの魔法使いを母にしているあたしは赤毛・・・  
長い赤毛には精霊の力が大きく宿る。

魔法の神の髪である・・・

更にドレスも素敵。それ以上はきりも無い。

町では捉としてショートヘアの人は住む事が出来ないらしいがあたしにとつては関係ない話。

まつ、ギルドで狙う人も多いみたいだけど全ての人気が守ってくれていた・・・

それまでは。

悪の人間・ダレクンが出現した。

## 第5章 テリオンシティー（前書き）

マゼンダがショートヘアになりますから。もう少しで

## 第5章 テリオンシティー

そいつはうわさだとクロウにあたしの髪をゲットさせる任務を  
そして魔王の手下になるらしい。

あたしの母をだまして自殺させ  
腹違いの娘のあたしだけ母以外の人は信じない。  
守ってくれる人も居なくなつた。

ロングヘアーはあるから町の辻で外に出すに住んでいる（え  
あたしは魔法の特訓をしまくり結構魔法を習得した。  
ファイアーやアイスなどね。

そのあたしを狙うダレクン。その任務を金田眞で受けている讐き  
クロウから逃げるしかない！

クロウたちは・・・

「お前、町を襲いに来た盗賊の仲間だな」

「やつつけやるー！」

2人の少年が現れたみたいだ。

俺らを盗賊と勘違い、やつづけるつもりだな。  
俺がやつづけてやるしかない

「ならば・・・」

俺は剣を一本取り出した。

「おやめなさい、ベル、ドル」

「この少年はベルとドルらしい・・・  
町のおばさんがとめにかかつたみたい

「こ」の人たちは普通の旅人だよ。盗賊ではない.....」

子供たちは小声で色々相談しているようだ。

そして俺らの前に来た

「『めんなさい』」

「だつて盗賊だと思つたんだもん」

俺の来た町・テリオンは始めてきた旅人を盗賊と疑う性質を持つ  
いる。  
ある道化師が来てからずつとある

その道化師はいざこにいるかはわかつてないがその道化師の杖を他  
の人が持つていた  
犬も女も持つていたらしい。

それはいいとして俺らはこの町でマゼンダを探す。  
赤毛を手に入れる為に

「雪、水面、花梨、進もうぜ」

そこに赤毛の少女が現れた。

## 第6章 切られたマゼンダの髪 ダレクン登場！－！－

「『この町に平和に過ぐ』して『この町を襲う』とは。許さない！」  
この女の子、マゼに間違えないはず……  
動けないようにするしかないですね。

「水を呼び出します。『水湖』」

雪は力タナに少ない水を垂らし、それを地面に突き刺した……  
その地面から小さな湖が出来た。

「酷い人たちね。『ファイア』」「

赤毛少女は炎を呼び出してきた。  
それが俺らを襲う。

「【水の精霊よ。敵の攻撃から守れ】『精霊氷壁』」

水面の水の精霊の力で発動する技  
この防御は強力。ファイア一発で簡単に消せる。

「トドメだああああああああ

ザシュン、ザシュン

「あやああああああああああああああああああああ

大成功。赤き魔法の髪ゲット……

赤毛少女は喚いているみたいだけど……

そこに貴族の服を着たおじさんや剣士の女性が現れた。

「マゼンダの父だ。マゼンダ、無残に髪を切られて、町に来る事は許さん」

あの悪の人間も

「マゼンダの父の一番弟子になつているダレクンだ。この町に住むのは禁止。ショートカットちゃんは」

剣士も

「貴方はこの街に来ないで下さい。マゼンダ。貴方はもう認められません。殺しますよ」

3人は相談した

「剣士、このマゼンダをやっちゃんさい」

マゼの父は剣士の女性にいかかつた。  
それが娘にやること?・・・  
犯罪じゃないか。

子供を殺すと言つのはテソミリオンでも重い重罪だ。

剣士はマゼンダに襲い掛かつた。

「俺がそうしてしまつたがこの女の子にはつみは無い。お前は俺が破壊する!」

## 第6章 切られたマゼンダの髪 ダレクン登場！－！（後書き）

ついにマゼンダ、髪を切られてしまったみたいですね。  
クロウが戦うです。

## 第7章 新たな目的（前書き）

第1部マゼンダの髪編終了

第2部魔王との戦い編のストーリーに移ります。

## 第7章 新たな目的

剣士は剣を俺に向けてきた。

俺が一人でやる・・・

「剣士、破壊するう『サンダーボール』」

俺は電撃を圧縮し、電撃の玉を呼び出す

電撃はバリバリ鳴りながら相手へ襲う

「・・・・貴方が何をしても叶える事など何も出来ないわよ・・・  
・・・」

剣士はセミロングの水色の髪を持ち、クールな性格をしていた。  
剣で俺の技の威力を軽減してきた。

「...嘘...」

俺の超必殺技が力負けした・・・・  
勝てるのか、俺の武器はハイソードが壊れ、ダガー1本。  
相手は高級な剣。

「私の勝ちです。」

「魂の覚醒。この超必殺技を見せてやる！――！【君臨者よ！血肉  
の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ！ 焦熱と騒乱 海隔  
て逆巻き南へと歩を進めよ！】『赤火砲』『

俺のこの赤火砲の威力は凄く、敵を蒸発させる程の威力だった。

だが副作用も強く、右手は大きい火傷が出来、当分は動かせない状況までなった。

「クロウがここまでやるとはな」

ダレクンはクロウがこれほど強いとは思つても無かつた。  
ダレクンはマゼンダの父を連れ、赤毛を持ち、去つて行つた。

町のおばさん「マゼンダ、貴方は髪を失つた。もう、このテリオンシティーから立ち去りなさい……」

ベル＆ドル「そうだそうだ」

俺の所為で、マゼンダをこんな田にあわせてしまった…………  
どうすれば良いんだ。

俺の仲間に入れればいいんだ。

クロウ「なら、マゼンダを俺たちの仲間にさせてください。」

町のおじさん「町から立ち去るならオッケー。」

俺はマゼンダを仲間にした。

だがこのテリオンシティーには謎がある。  
近くのテリオンタワーに行くしかない。

## 第8章 シュウド・マルクス！－！（前書き）

久々の更新です……

## 第8章 シュウド・マルクス！－！

ダレクン「これで魔王を復活できる。」

こにはダレクンの城、ダレクンはマゼンダの髪を入れ、魔王復活を企んでいた。

マゼの父「あ、甘い。テリオンの近くのテリオンタワーには涙の秘宝の書物書が眠っている。ダレクン。その塔に行く

ダレクン「よからう。涙の秘宝か、それは得体の知れない物だ。どんな効果があるかもわからん」

マゼの父「ダレクン様、モンスターと言つ物を使い、必ずや、クロウ軍を止めてきます。」

ダレクン「モンスターはまだ実験台。邪悪な力を入れる為にも魔王は必要だ。」

マゼの父「魔王復活の儀式をするんですね。ダレクン

ダレクン「てめえはもう、俺の手下。ダレクン様といしなさい。」

マゼの父「アリアリ差」

\* \* \*

クロウ「マゼンダ、お前の特技は何

」「

俺はクロウ、前回右腕を大火傷してしまい、戦える状況ではない。

マゼンダと言う女の子と話している。

マゼンダは赤い髪をショートレイヤーにしている。俺は切ったからな。

碧いスカートは印象的だ

マゼンダ「なにい、あたしの特技を教えてもらいたいわけ。教えてあげるわ。ファイアーアイスよ」

初級系魔法ばかりじゃん。

その程度だったのか

クロウ「もう少し強くなりなよ

マゼンダ「もー、あたしだって頑張っていたわ。今はエアロをもうすぐ習得できるの。」

俺はマゼや花梨、零と水面の4人で旅をしている。  
テリオンタワーに行く為に

「シャドウ・ナイトメア、スナー・サイクロプス。やつて来なさい  
！」

こいつは逆立てた茶髪の短髪に鉄の鎧をつけている。  
槍と斧を持っている男だ。

そいつはダレクンの手下でマゼの父がクロウたちを倒す為に用意した男。

その奴は……

ショウテ・マルクス――――――！

## 第9章 モンスター戦

敵はスノー・サイクロプスとシャドウ・ナイトメア。シャドウ・ナイトメアは弱め、やな特技を持つが

だがスノー・サイクロプスは並大抵のモンスターではない。巨人で攻撃力や体力が高い。知能が無い攻撃型なのでそこで相性によつては有利かもしえない

クロウ「お、俺は戦えない。」

マゼンダ「クロウの力を借りなくともあたしだけで充分！－『アイス』」

マゼンダはスノー・サイクロプスに向かってアイスを放った。だが効いていないようだ・・・・・

花梨「マゼンダさん、戦闘能力無いの。私の炎を見せるわ『火炎滅多切り』」

シャドウ・ナイトメア「くそー」

シャドウ・ナイトメアは音を立てて消滅

スノー・サイクロプス「グガアアアアアア」

スノー・サイクロプスは思いつきり殴ってきた。  
俺らは全員避けたが

花梨「槍の一撃よ『サンダーランス』」

電撃が帶びた槍でスノー・サイクロプスに攻撃。  
ダメージは低いが氷サイクロ（スノー・サイクロプスの略）は体制を崩した……

雪「トドメです！！！『水竜大乱舞』」

水の龍を出現させ、スノー・サイクロプスを貫いた。  
かなりのダメージだが氷で体の傷が消え去った。  
かなりの血を減つたはずなのに何故か襲つてくる。

マゼンダ「この技ならばいけるわよ。多分『ファイア』」

炎がスノー・サイクロプスに当たつた。  
火力は弱く、スノー・サイクロプスには効かなかつたんだ……

「グガガガガガガー」

スノー・サイクロプスはかなり凍る程の息を吐いてきた。  
このダメージは俺ら全員にかなりのダメージとなり、地形も凍つた。  
相手は氷の地形が得意なはず。かなり不利だ……

「ガアアアア」

相手はかなり知能が低く、氷に滑つて頭を打つたようだ。

「やはり、スノー・サイクロプスは使えないな……」

其処に現れた男は多分、モンスターを放つた奴だ。  
僕らの敵だ。

「アンタはどうちら様ですか」

僕は相手に向かつて質問した。  
そして

「……俺はシュウド・マルクスだ……」

## 第10章 桂水花覚醒……シュウド・マルクスとの決闘

「アンタは俺とサイクロプスによつて殺される。それが運命だ……」

アイツはスノー・サイクロプスと2体で僕らへ襲い掛かってきた。

僕は攻撃をかわした。

しかし、マゼンダはスノー・サイクロプスの攻撃を食らった。

「なかなかきついですわね……『風雷乱れ突き』」

花梨は槍を手にかざし、槍に風と雷を宿らた。

その後、スノー・サイクロプスへ攻撃し続けた。

スノー・サイクロプスは悲鳴を上げた  
相手の急所全てに当てる事が出来た……

スノー・サイクロプスはかなりのダメージを受け、力尽きた。

「僕と私は二人で一つ。合体するしかない。『フュージョン』」

雲さんと水面さんは一人で一つとなつた。  
それは一人の小さな少女だった。

薄い水色のセミロングヘアに少しウェーブをからませ、パーティードレスをつけている

その人の名前は桂・水花。

容姿はかなり可愛い少女だった

「邪魔……『霧氷針』」

水花が刀を振ると相手の頭上に氷の針が大量に出現した。  
それが降り注ぐ

「あ、あまいよ」

相手は上からの攻撃を槍を振り回して受け流した……  
そして僕に襲い掛かってきた。

火傷しているけど少しは戦える。  
僕はダガーを構えた……

「そんな短剣で俺に勝てるか！――！」

「それしか武器はないんだよ――！」

そう、僕にはダガー一本しか武器は無い。  
ある可愛い男からハイソードを貰つたけどそれは壊れたから……

しかし、ダガーでも僕の実力ならこの状況でも勝てる！――。

僕のダガーと相手の槍は結構互角だった……

「チイ、槍じや 相手は強いから勝てないか……」

相手は槍を斧に持ち替えようとしている……  
チャンスだ

「うりゃああああああ

相手は槍を投げた……  
僕はダガーを弾かれてしまった。

やばいっ！――！

「【炎よ、当たれ！――】『ファイアーハー』」

赤いショートヘアの少女、マゼンダは相手の男に炎をぶつけた……  
かなり効いているようだ……

「――こしゃくな――！」

「俺の本当の力を見せてやる――！『天昇斬』」

相手は槍と斧を持ち、僕に襲い掛かってきた。

「あぶないっ」

花梨は飛び出してきて僕を守ってくれた。

だが、花梨は攻撃を代わりに喰らってしまった……

相手は花梨を打ち上げて、地面に叩きつけてきたんだ。  
さすがにこれだけの一撃はかなりのダメージのようだ……

「ぐつ、仕返しよーーーー！」雷撃一閃突き』

花梨は槍に雷を宿らせ、相手を攻撃した。  
その威力は相手を麻痺させるほどだった。

「トドメ、水花さん。いくぞーーーー！」

僕と水花さんのダブル攻撃

チームワークで相手を切り倒した。

「テリ…… オン…… タ…… 行か…… い」

相手は力尽き、倒れた。

僕らはテリオンタワーへと向かった……

## 第10章 桂水花覚醒……ショウド・マルクスとの決闘（後書き）

別サイトで筆記中です。

そのため、別サイトである程度進むまで次のページは無理だと思われます。

## 第1-1章 テリオントワーの扉（前書き）

筆記中でいの先はほとんじ出来ていません。  
ギリギリの状態で投稿しました。

更新スピードは遅くなるので要注意を

## 第1-1章 テリオンタワーの扉

「やつとつこたな」

「やつですね」

俺らは歩き回った。一つの扉があるだけで他に入る入り口は見つからなかつた。

その入り口を水花さんに開けてもらひ、「こ」と云つた。

水花「普通にあけよ!」

開かない、開かないようだ。

「水花、俺がやる……」

無理だつた。俺も花梨さんも開けられなかつた。

この扉を開けるのは無理なのか……

何か方法は……

マゼンダさんなら知つてゐるかもしけない。

「クロウには教えないつ……」

「どうしてだ、マゼンダ」

「クロウさんの所為で街を追放されたんだもん。仲間だけね」

「マゼンダはやった。俺は答える

「でも世界を救う、ダレクンの陰謀だったんだよ。」

俺は言った、マゼンダは答える

「どうあこずこの扉を開ける事よ。多分……」

「マゼンダさん、教えて」

「花梨さん、いいわよ。あたし、教えるつ……」

マゼンダは扉の下を持ち、上に持ち上げた。

かなり軽いらしく、力のないマゼンダさえあけられた。  
こんな扉だったとは……

## 第1-2章 モンスター軍団との戦い（前書き）

更新までしばらくお待ち下さい。

5・6月あたりに更新されると思われます

## 第1-2章 モンスター軍団との戦い

！！

ウリボン、じんめん蛙、ベビーサタン、コートル、ヒールスライムなどこの塔へ生息しているモンスター達が歓迎してくれた

歓迎といっても、襲つてきたという迷惑なだけの話だなぜなら…敵で、進むのの侵害だから

「水の精よ、力を貸して！…！『霧氷針』」

水花は水の精のご加護を貰い、氷の針を相手の頭上へ出現させた。それが相手を蜂の巣のように襲い掛かった…

「ビィキイム』コートルバリア』

その攻撃はコートルが全て消し去ったようだ…しかし、コートルは体力を消耗したよう…

「コートルは魔法を無効化するが、生命力を半分使用してしまうと…」  
「特殊能力を持つ。生命力が比較的高いけど」

花梨はそう言い、槍でコートルを突き刺した  
コートルは青い血を噴出し、崩れるように倒れた

マゼンダは炎を出現させ、じんめん蛙へ炎で襲い掛かる

じんめん蛙はうしろの人の顔を見せてきた…

「…ぐつ」

じんめん蛙は口から火の息を吐き出した。  
その息は熱く、俺らは結構体力を奪われた。

ウリボンは俺に突進をしてきた

「貴方はあたしが守る…！」『精霊氷壁』

水花は水の精から力を借りて、俺の前に壁を作り出した。  
ウリボンはその壁に攻撃を当ててしまい、衝撃でひるんでいる

チャンスになった

「天空よ、雷の力を分け与えん『サンダーボール』」

俺は電撃の力を持つ電気の球を出現させた  
その電撃がウリボンを包み込み、消し去った

ベビー・サタンはイオナズンを唱えた  
しかし、MPが足りなかつた…

アホか！…！

「本気で行きますわよ『水流破』」

水花はベビーサタンに向かつて水流攻撃を放つ  
ベビーサタンはギリギリで耐え切つた…

ヒールスライムは触手を動かしベビーサタンのダメージを減らした  
ようだ…

回復魔法を使えるとはきつい相手だ

「スピードは力なり、急所攻撃！…『風雷乱れ突き』」

花梨は猛スピードで全ての敵の急所を刺す  
じんめん蛙には攻撃をしなかつたのが効かなかつた  
俺にやれと言つていい感じだった。

「クロウ、じんめん蛙は人顔向けたときは防御が低く、回避にく  
いわ。チャンスよ」

花梨は俺に言いかかる

俺はその言葉を信じ人面蛙へ攻撃を放つ

「ううやあああ

剣で2つに切り裂いた

やつたー、倒したぞ、倒したぞ

俺らはどう進んでゆく、この塔を進んでいけば手がりが取れ

るからな

### 第1-3章 塔の大探検

「この塔は扉を開けると外が見える通路だつた。屋根がなくて、緑色の木々、青空が見える。

「外が見える？」

水花は外の綺麗な姿を見て、そう叫びつ。

「クロウっ、あたし、疲れた。おんぶよろしく！」

マゼンダは少し疲れた様子…

だが、先は長い、俺の事も考えてほしいとも思つた。  
だが、俺もマゼンダには重大な事をしてしまつた：  
その為、いつか、おんぶをすることになるかもしれない。  
だが、今はまだ、早いつ。

「我慢しな、クロウさんは今はしたくないと思います。わがままは言わないこと。わかつたわね！」

花梨はマゼンダに言った。  
マゼンダはうん…とつぶやいた。

俺達はドアを進む、それすると一つの扉があり、鍵が閉まっていた。

「この鍵、開けといつ。後から行く時の近道になるかもしないし」

水花の言つとおり、この鍵を開けなきゃいけない。

俺はその鍵を開けた。

「まじい、上行へのところへのがある。どうぞどうつか……」

俺は仲間達に求めた。

「あたしは大がいになつ

水花がまず、話す。

すると、マゼンダも花梨も下りていった。

下へ行く事にした。

もじワナだったとしても防ぐ事は出来るかわからぬ。

そして俺達は降りてゆく。

すると、沢山のたらると宝箱があった。

「全て調べるぞ」

俺達は全て調べた。

入っていた物は薬草一つと少量のお金だった。

この塔にはこれぐらいの宝しかないのか。

まだ、塔の入り口のような物だから仕方ないか…

俺らは上に行き、上のぼりを上った。

そして扉から出し、落ちたら死ぬと言ひほどの高さの場所を頑張つて歩いてゆく…

そして恐らく、最上階に続く建物だと思われる所についた。

## 第1-3章 塔の大探検（後書き）

この塔はもうリーザス像の塔といつてもいいですがその他の仕掛けも用意するつもりなので完全なるパロディにはならないです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3255c/>

涙の秘宝・クロウの正義

2010年10月11日14時52分発行